

大谷大学 2019

# 親鸞エッセイコンテスト

## 「よりそう」

# 受賞作品集

### 募集要項

応募期間	2019年7月11日(木)～9月19日(木)必着	表彰	各部門から最優秀賞1名 ※賞状・副賞(図書カード3万円分を贈呈) 各部門から優秀賞2,3名 ※賞状・副賞(図書カード1万円分を贈呈) 各部門から新聞社賞1名 ※賞状・副賞(図書カードを贈呈) 奨励賞若干名 ※賞状・副賞(図書カードを贈呈)
募集内容	「よりそう」をテーマにエッセイ形式で書いてください。【800字以内】 本コンテストの詳細については、大学ホームページをご確認ください。	受賞発表	受賞作品は、11月中に大谷大学ホームページにて公表し、後日全文を掲載します。 なお、応募作品は返却しません。また応募作品の著作権はすべて大谷大学に帰属します。
応募部門	高校生部門・中学生部門		
応募方法	①パソコンでの印字、または手書き ②チラシの裏面、または大学ホームページよりダウンロードできる応募用紙に必要事項を記載して、右記応募先までお送りください。		
応募先 問合せ先	【郵送】〒603-8143 京都市北区小山上総町 大谷大学 高大連携推進室(企画課)「親鸞エッセイコンテスト」係 【TEL】075-411-8350 【FAX】075-411-8149 【メール】renkei@sec.otani.ac.jp (月～金 9:00～17:00 祝日、大学で定める休日を除く)		

協力・協賛・後援

【協力】真宗大谷派(東本願寺)、真宗大谷派学校連合会、九州大谷短期大学

【協賛】中外日報社、文化時報社 【後援】京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会

大学ホームページ

<http://www.otani.ac.jp/shinran18>

Be Real 大谷大学  
寄りそう知性

【高校生部門】

## 最優秀賞

私立伊那西高等学校 第1学年

加藤 桜彩

お母さんの誕生日は偶然にも休日だった。けれども、だからと言って何をすることも無く、いつも通りに家で過ごして、いつも通りに日が過ぎていくのを待っていた。実の母親の誕生日にも関わらず、おめでとうの一言も言えない私は本当に親不孝な娘だと自分自身でも思った。

そんな日の午前中、誕生日である当の本人が藪から棒に「外へ出かけよう。」と言った。いきなりの誘いで戸惑いはしたものの、私自身外出することが好きだったので快く受け入れた。まず最初にドーナツ屋に行ってドーナツを食べた。お母さんも私もドーナツが大好きなので思いのほか沢山のドーナツを買ってしまった。買う時、店員さんがトレーに乗った大量のドーナツに驚いた顔をしていたのがとても面白くて、お母さんと顔を見合わせて笑ったのを覚えている。結局ドーナツはほとんど私が食べてしまって、お母さんは少ししか食べなかった。お母さんの誕生日なのに、私の方が良い思いをしていて申し訳ない気持ちが食べ終わってから湧き上がってきた。その後服屋に行って服を見たり、本屋で気になる本を探したりしても、買ってもらうのは私ばかりで、私はお母さんに何もしてあげることができなかった。

流石に居た堪れなくなり、私はお母さんに「誕生日だから何かプレゼントするよ。」と言うと「じゃあプレゼントはいらないから、そのかわりにお母さんのお願いを聞いてくれる？」と尋ねられた。お願いって何だろう、と一瞬気になったものの、即座に「いいよ。」と答えた。

「一緒にお昼寝をしよう。」それがお母さんのお願いだった。お母さんは誕生日プレゼントのかわりに私と一緒にいる時間を望んだのだ。そう思うと、自分が必要とされているような気がしてうれしくなった。結局「おめでとう」は言えず終いで、誕生日プレゼントもあげることができなかった。それなのに、お昼寝をしている時のお母さんの寝顔はとても幸せそうだった。

【高校生部門】

## 優秀賞

私立大谷高等学校 第1学年

新谷 珠央



「よりそう」それは静的な動作に思える。しかし本当は、とても力強い行動なのだと思う。

「ただいま。」「おかえり。」私は部屋に駆け込み、布団にうつぶせにねころんだ。小学二年生の話だ。母が部屋に入ってきた。うつぶせになった私の背中をさすり、今度は一緒に横になって、私を抱きしめてきた。「私が泣きそうになってるのは見えてないはずなのになぜ？」不思議に思いながらも、私は母に抱きついた。「わーん。」気付かないうちに私は泣いていた。こらえていた涙があふれ出た。いっそう強く母に抱きついた。母も抱きしめ返してくれた。少し落ち着いたところで母が私に尋ねた。

「何かあったの。」「放課後サッカーしてたら、男の子にボールをさわるなど言われた。そしたら周りのみんなが笑った。友達がいなくなってしまうと思って、怖くなった。」再び涙があふれてきた。母はまた私をぎゅっとして背中をさすってくれた。しばらく黙って「よく話してくれたね。明日学校行ける？まだ怖い？」私は黙っていた。まだ怖いような行きたくないような気持だった。「行きたくなかったら行かなくてもいいよ。ママはきっと大丈夫だと思うけど。」もう一度ぎゅっとして母に抱きついた。母もぎゅっとして背中をさすってくれていた。

今度は少し向きを変え母は背中から私を抱きしめた。私の目の前が少し明るくなった。冷たく凍りかけていた心が少し解け始めていくのを感じた。母は返事をせかささない。私も黙って背中にぬくもりを感じながら、母の腕にしがみついた。あの時はきっと体だけでなく心がよりそっていた。「明日、学校行ける。」もう一度母にしがみついた。私は泣いていた。

体が「よりそう」、心が「よりそう。」動きはない。しかし心を動かす。そしてその心が体を動かす。私のよりそいも、いつかだれかの力になりますように。



【高校生部門】

## 優秀賞

私立大谷高等学校 第2学年

田口 絵子

私には、認知症の祖母がいる。最近の祖母は、家族や周りの人のした話を、すぐに忘れる。忘れるはやさも、この頃は1分もしないうちに忘れるのだ。

祖母は、もうすぐ80歳になるが、体は丈夫だ。だけど、祖父は右半身が不自由なのだ。その代わりに頭はしっかりしている。まるで、真逆だ。

そんな祖父は、私にこんな話をしてくれた。

「認知症のばあちゃんは、何度も同じこと聞いてくるけどな、それを無視したらアカンねん。すぐ忘れてしまって、自分自身が“孤独”やと思うからな。毎日毎日、一緒におったら、じいちゃんの方がおかしくなりそうやけど、ちゃんと話、聞いたらな。」

複雑な気持ちだった。

祖母は、何度も何度も同じ事を聞いてくるし、正直、さっき聞いてたやん！と言いたくなる。カギなどの大事なものでさえも、すぐになくしてしまうし、それらをなくしたことさえも忘れてしまう。祖父程、一緒にいる時間が長くない私がこんなにイライラ、モヤモヤしてしまうのに、ずっと一緒にいる祖父は、何度同じ事を聞かれても、ちゃんと丁寧に対応している。



別の日になるが、こんな話もしていた。



「じいちゃんが、こんな体になってしまって苦勞かけてる分、ばあちゃんのことには大事にしたらんな。」と。

体は丈夫でもすぐに忘れてしまう祖母と、頭はしっかりしているけれど、右半身が不自由な祖父。

多分、2人は意識していない。けれど、自然と互いの足りない点を補って助けあっている。たまには、ケンカもするけれど2人共、互いを見捨てない。

そんな私の祖父母は、「よりそう」というものの形だと思う。





【高校生部門】

# 中外日報社賞

私立大谷高等学校 第1学年



相馬 朱里

幼稚園の頃、私は絵を描く時間が一番苦痛でした。ある日、鯉のぼりのデザインを描いて一人ひとりのを見せ、いい作品に手を挙げるといった時間がありました。みんなの作品に次々と手が挙がり、自分の作品の番になると誰一人と手を挙げてくれませんでした。自分の絵は下手だと思われているのかと落ち込みました。それをきっかけに、絵を描かなくなりました。

小学校に入ると図画工作の時間に、自由に絵を描く授業があり、私は授業の最後まで白紙のままでした。そんなとき、先生が近づいてきて、怒られるかなと思っていたら、先生はかがんで、私と同じ目線で、

「好きなものを楽しんで描いたらいいよ。色んな絵があるからこそ面白いんだから。」と声を掛けてくれました。私の心によりそってくれる先生のおかげで「ああ、絵を描くって楽しいことだったんだな。」と気持ちが救われたような気がしました。それ以降、絵を描くことに抵抗はなくなり、段々と好きになっていきました。私は、中学生の時から美術部に所属しています。もしあの時、私が先生に絵を描くことを強制されたり、怒られていたりしたら、ずっと絵を描くことが嫌いなままで、今、絵を描くことが好きな自分はいなかったと思います。言葉の選び方、言い方次第でこんなにも人の気持ちや人生を変えられることを身をもって感じる事ができた出来事でした。

「相手を感じている世界と同じ世界に立ち、相手と気持ちを共有しようとする。」心によりそうとはこういうことだと思います。私はこんな風に、大切な身の回りの人たちによりそえているのでしょうか。弱気になっていた私の心によりそい、前向きになれるようサポートして下さった先生のように大切な人の心によりそえるような人になりたい。



【高校生部門】

## 奨励賞

私立昭和学園高等学校 第3学年

坂本 百優

私にとって「よりそう」とはどんなことだろう。いつも側に居ること、困っていたら助けてあげること、色々考えてみたが、どれも少し違うように思えた。「よりそう」ってどんな意味だろう、と考えた。心が温かくなって、「ああ、この人と出会えて良かったな」と思えた時、それは「よりそう」ことが起こっているのではないか、と私なりに分析した。

私は、いつも一緒に居るような固定した友達は居ない。しかし、本当に息詰まった時、「ラーメン行こうよ」と誘ってくれる友達がいる。その友達と私は何もかも正反対である。運動がガンガンできてアクティブでリーダー気質の彼女と、運動音痴で引きこもりがちな私。入学式で話した時、「きっと私とは合わないだろうな」と正直なところ感じた思い出がある。しかし、ふとしたきっかけで放課後に一緒に勉強したことがあった。そして、初めて深く話した時に、彼女は私と同じ境遇で同じようなことで悩み、そして同じ志を持ってこの学校に入学したことを知った。彼女は、大げさに同情するわけでも、味方のような発言をするわけでもなく、一生懸命に話を聞き、そして話してくれて、「頑張ろう」と言ってくれた。それから、入ったことのなかったラーメン店に連れていってくれて、語らいながら麺をすすった。このことをきっかけに、私達は月に二度ほど「頑張ること」ができると、決意を胸に二人で麺をすするようになったのだ。

「よりそう」ことは、大げさなことでもなくとも良いと思う。慰め合うことでも、励まし合うことでもなく、明日を生きる活力をつけることだと思う。箸を置いた時、「幸せだ、明日も生きよう」と思い、互いに志新たに帰っていく。振り返ってみれば、そんな時を密かに楽しみに頑張っている自分がいた。「卒業して離れても、一緒にラーメンを食べようね」と笑う友達を見て、心が温かくなった。この青春は宝物だと思った。



【高校生部門】  
奨励賞

私立大谷高等学校 第3学年

清水 涼華

今年の四月の半ば、私はこれまでで最も大きいであろうケガを負った。左膝の負傷だったため、生活が一転し、ケガをして間もない頃は左足を引きずりながら歩き、膝の曲げ伸ばしもできなかった。登下校の際は電車に乗っているが、階段の上り降りが辛かったため、全てエスカレーターかエレベーターで移動しなければならなかった。

学校内も同様である。走ることもままならず、歩く速度も遅くなってしまって友人にペースを合わせてもらうなど今でも迷惑ばかりかけている。友人たちは「気にしないで」と言って手伝ってくれるが、私は申し訳ない気持ちがあつた。一番辛かったのは、体育の授業に参加して思いきり体を動かしたり、長時間家族と出かけたりと周りの人と同じようにできなくなったことだ。なぜ自分だけがこうなるのかと悲しくなった。

あるとき、ふと気づいた。例えば駅によっては階段でしかホームに降りられない場所があったり、電車の中では優先座席に座りたいと思ったが席が埋まっている。でも譲ってほしいと声をかけづらい状況であるということ。その時、今まで実感することのなかった社会の中で何かに対して不便だなと思っている人の視点をリアルに感じ取ったような気がした。これは左膝を負傷していなければ体験できなかったことかもしれない。そう思えば、今回のケガも意味のあるもののようにとらえることができた。

人の心に寄り添うという言葉が当たり前のように私たちは発しているが、実は行動に移せてないことの方が多いように思う。ただ、そのことに気づき何かアクションを起こそうという気持ちが芽生えた瞬間こそ、寄り添っていると言えるのではないだろうか。





【中学生部門】

## 最優秀賞

私立大谷中学校 第2学年

宇都宮 杏香

このテーマを見た瞬間、塾に通っていたころのあるシーンを思い出した。ハードだった受験前の夏。なかでも、「出来るまで帰れません」という科目は別格だった。テストで全問正解しないと、帰れないのだった。簡単にクリアする日もあったが、私の場合、そう簡単にはいかない日が多かった。

ある「帰れません」の日、塾生が一人、二人と帰っていき、とうとう私一人が教室に残された。焦るけれど、何度やっても全問正解しない。時間だけがどんどん過ぎて、結局、次の日に持ち越しになった。

当時、塾の送迎は、たいてい母がしてくれていた。その日も、母は車でずっと待っていてくれた。普段は何かと様子を聞きたがる母だが塾から出てきた私に笑顔で、「お帰り」と、たった一言。つられて私も笑顔になったが、そのまま涙がぼろぼろあふれてきた。出来なかった悔しさと、一人ぼっちで残された寂しさ、母の顔を見てホッとした気持ち、もう塾なんて行きたくない、勉強なんて嫌だ、色々な気持ちが混ざり合い、言葉でなく涙だけが出てきた。当然、母は私が居残りだということは知っていたが慰めることも責めることもせず、静かに、「うん、うん。」と、うなずいていた。母は、まさに私にそっと寄り添ってくれていたのだと思う。

あの時、私は本当に辛かった。その辛さを、自分自身で吹っ切れたのは、母のあの寄り添いが、とても大きな力になったと実感している。一緒に笑う・話す・そばにいる、いろんな寄り添い方があるだろうけれど、人に寄り添うには、まず、どれだけその相手を見てあげられるかだと思う。この私でも誰かが見てくれていると思うと安心するし、自然と力が湧いてくる。私も誰かの力の源になれるよう、人との関わりを大事に、そして大切にしていこうと思う。



【中学生部門】

## 優秀賞

私立札幌大谷中学校 第3学年

佐藤 瑛峻

「よりそう」というのは、一体どういうことなのだろうか。曾祖母とのやりとりをもとに僕なりに考えてみた。

僕には今年百歳を迎えた曾祖母がいる。曾祖母の百寿はとても喜ばしく、今年一月、僕は母の実家に赴き、母方の親戚と共に、曾祖母の百歳を寿ぐことができた。

曾祖母と僕とは今は離れて暮らしているため、普段ほとんど会話することはない。祖母から聞いた話によると、曾祖母の百年間は、嬉しい出来事や悲しい出来事など、様々なことがあったそうだ。曾祖母は第二次世界大戦中に三人の男の子を生んだ。しかしその当時、食べ物が少なかったこともあり、三人とも栄養失調で一歳になる前に亡くなってしまった。その時の悲しみは計り知れないものだっただろう。第二次世界大戦が終わってから、僕の祖母を含む三人の女の子が生まれた。やがて、母たちの孫の世代が生まれ、そして僕のような曾孫の世代が生まれた。

この夏、僕は曾祖母に会いに行った。曾祖母は、「元気じゃったかね。暑い所に来てくれてありがとう。」と嬉しそうに僕に声をかけてくれた。曾祖母は熱心な安芸門徒で、毎朝毎晩、お念仏を唱えて生活している。僕が、なぜ毎朝毎晩仏様にお念仏を唱えるのか聞くと、

「そこに仏様がおってじゃけんよね。それだけ。」

と、曾祖母は笑いながら答えてくれた。単純な曾祖母の答えに、僕も笑ってしまった。もしかしたら、曾祖母は常に仏様によりそってもらっているのかもしれない。

嬉しい時も悲しい時も沢山あった曾祖母の百年間は想像するだけでも長い年月だと感じる。また、大正、昭和、平成、令和と変わっていく中でも常にお念仏を欠かすことなく生活するのはすごく大切なことだと思う。僕は曾祖母の人生の深さを知ると共に、曾祖母がいるからこそ僕が生かされていることを感じるができる。これが「よりそう」ということの一つではないかと僕は思う。

【中学生部門】

## 文化時報社賞

飯田市立高陵中学校 第3学年

尾澤 祐奈

私の母方の曾祖母は、今は特養でお世話になっています。

時々、大伯父や祖母、母などが訪問しています。日によってですが、来た人が誰かが理解できる時もありますが、ほとんどの時は、わからない状態です。



それでも、昔の話をしたり、最近あった出来事など様々な話をして時を過ごしています。時には、「そうだな～」「うんうん」と、話に反応してくれます。そんな時は、少しうれしいと母は言います。

お世話になっている施設の方々は、いつもにこにこ笑顔で、曾祖母のお世話をしてくれています。まるで本当の家族のように。元気に、また、優しく話しかけ、そばによりそって。それがわかるのか、とても穏やかに過ごしています。

数年前までは、母が会いに行き、帰り際に泣きながら「帰りたいよー」、「寂しいよー」と言って腕をつかんでなかなか離さず、帰ってくるのがつらかったそうですが、最近は「また来るからね」と帰り際に話しかけると「はい」と、無表情で返事が返ってくるだけで、それはそれでつらいそうです。

それでも、自分が誰だかわからなくても、会いに行っています。「大切なおばあちゃんだから。小さい頃いつも、どんなときもそばによりそい見守っていてくれた。」「心穏やかに過ごしてもらいたいんだよ。」と言っていました。

私はその立場になったら、どうよりそい、どう行動できるか。今の私にはまだわかりません。でも今の母達のように、そっとそばにいただけでも、曾祖母の心に「よりそう」ことができるのかな。そうすることで、母達の心に暖かい何かが流れていくのかもしれないと思います。「よりそう」とは、なかなか簡単に出来ることではないのかもしれない。



【中学生部門】

## 奨励賞

私立大谷中学校 第3学年

小野寺 詩

風邪をひいて寝込んだ日は、決まって幼少期の、母が薬を買いに行っている時の哀しさを思い出します。当時の私にとっては、よく効く薬を飲んで安静にしているよりも、母の暖かい手で看病してもらう方がよっぽど風邪の辛さを和らげられるのでした。

「相手の心に寄り添う医療」というフレーズを耳にしたことがあります。病人にとって孤独感ほど辛いものはありません。しんどい、苦しい時、その状態からの抜け出し方がわからなくなり、悪循環に陥ってしまいがちになります。そんな時、そばにいてくれて、見守ってくれる、そんな人の優しさがよく身に染みて、とても心強いのです。誰かに大切に思ってもらえているのを感じ、自分自身も誰かを大切に思っている、それが「寄り添う」ということなのではないかと思えます。

少し前、体調と気持ちが優れず、しんどいと感じることがありました。自分は独りだ、と思い込むとますますしんどくなるのです。しかし、苦しんだ分だけ人の温かみや優しさ、寄り添うことの大切さを改めて実感できた時間でもありました。

誰かの心に寄り添うために絶対に言葉が必要だとは思いません。元気が出ない時、「元気出して!」と言われても元気の出し方はわからないし、頑張らなければいけない時、「頑張って!」と言われてもこれ以上どう頑張ればいいのかわかりません。必要なのは、ただお互いに信じ合い、思いやることではないでしょうか。

生きていく上で必ず、辛いと感じる時があるはずです。私にもその経験があって、その辛さがわかるからこそ、そんな人の為に、そっと心に寄り添い、支え合った生きていける、そういう人間になりたいです。

